

養生学会「雲南の旅」に参加して
長野県短期大学 横倉長恒

「雲南の旅」、今その余韻が頭の中を占めている。もう一ヶ月も経つというのに。

今年は、八月三十日から九月三日の「雲南の旅」に参加させていただいた。二年前のチベットの旅も含め、都合三回目の参加である。古代文学を専攻して、まもなく四〇年が経とうとしているが、この間、雲南への夢を見続けて来た。私の関心は、歌垣へのものだ。何時か何時かと、これまでは雲南に関わる多くの映像を見、調査報告を見聞きし、特にミャオ族の文化についてはそこそこのものを蓄えて来た。チベットからの帰りには上海博物館で、少数民族の展示を見まくり、何時かのために備えてもいた。そうして今回の雲南へのお誘い。まさかと思いながら、張先生には即座に参加を伝えた。

彝族の村へ。三味線に似た楽器を持った白を貴重にした民族衣装の若い男女が、歓迎の群舞。「これか！なるほど」、現場のそれが良い。旅の全てが予感されたようだった。

いよいよ集落に入る。空から昆明を眺めて、異様に赤い土が気になっていたが、この一帯はこういう土壌らしく、村の建物は赤土の日干し煉瓦で造られていた。古い村のように思えた。修理の現場があった。ここにはここの修理法があった。

村長さんのお宅へ向かって坂を下っていたとき、廃屋になったのではと思われるところがあった。ここではどれ程の人々が暮らしているのだろう。それにトイレが気になった。

チベットのポタラ宮の入り口で体験したトイレ以来、中国のトイレを見届けたいと思っていた。私は今、東京に家族を残し、長野県の真田町に住んでいるのだが、真田の家には最初簡易水洗を取り入れていたが、国策のインフラ整備の恩恵を受け、三年前水洗にかえた。古代文学を専攻したものにとっては、まさに^{かわや}廁（川屋）の存在が確認できていることもあって、妙な関心は広がるばかり。このところはトイレの遺跡から様々な情報を読み取っている考古学の成果に関心が向いていたので、彝族のトイレの構造と、汚物の処理をどうしているのか知りたくなった。

村長さんのお宅では、御高齢のお爺さんが人民服の^{いでたち}扮装で迎えて下さる。お茶に、りんごに……。長野のりんごとつい比べてしまう。しかし懐かしい味だ。曲屋風のお宅には幾つかの部屋があったが、その一つを覗かせていただくと、壁には紙人形が幾つか貼ってあり、その前には小さなテーブルが置いてあった。最近祖霊を迎えるお祭りがあったとか。その一部始終を体験したかった。庭の壁際には、秘かに期待していた蘭が咲いていた。

この御宅を去るとき、何れこの村も無くなるかもしれない。木曾路の妻籠のように

保存されたら良いのにと、ふと思った。

この後立ち寄った民族村では、神話研究の上で大事な「兄妹始祖譚」の存在を知った。今後の研究と講義に生かせる。(ガイドの馮さんが懸命に案内をしていた。藤沢市との関わりの中で日本語を学んだとのこと。日本はまだ体験してないという。)

納西族の民族博物館へ。二日目は麗江の「トンパ」文化に見える。トンパの音楽と踊りは予めビデオで体験していた。トンパ先生のコスチュームは「確認」することができた。驚いたのは博物館の展示物にトンパ文字の「蛙」が記されており、デندن太鼓があったことだ。

チベットにも「蟮」(ガマガエル・ヒキガエル)がいた。成都にも。成都の蛙には、背にお金が掘られていた。成都郊外四十キロの三星堆遺跡からは石の「蟮」が発掘されている。金沙遺跡からは「蛇蛙同案」(青銅の台)が出土して、ここにも「蛙」を見ることが出来る。馬王堆遺跡出土の「帛」には、絵が描いてあり、天上界を示すと思われるところには、三日月の下に「蟮」がいる。この生き物は、自分の夫から西王母の不死の仙薬を盗み、月に逃げてその精となった「嫦娥」とされる。日本の筑波山には四六の蝦蟇がいる。『延喜式』祝詞には「谷蟮」が、地の果てを示す生き物として登場し、憶良の歌にも同様に現れる。チベットでは薬の材料にするらしい。蛙・薬・不死・・・繋がる繋がる。因みに、納西族の蛙は、多産を祈る神なのだそう。これは全く知ら

ないことだった。

次には納西族の村へ。何キロバスに揺られたろう。何頭もの小柄な麗江馬が繋がれた所で下車した。久しぶりで馬糞の匂いを嗅ぐ。と、家の神さん、何を思ったのか、いきなり馬を目掛けて歩き出す。「マズイ」と思う間もなく、馬が逃げ出す。蹴飛ばされずに済んで一安心。馬を鎮めに来た納西族のおっちゃんに「チンプトン・カンプトン」の言葉で何やら話していると思ったら、さっさと馬に乗って行ってしまおう。アア!

振り返ると、横沢先生が白馬に跨って来られる。長谷川氏も。確か太田先生も。後で伺ったことだが、和田先生は、わずかに生えていた木の下で、お一人、広大な空を眺め、自然を体感して居られたらしい。

家の神さんが馬を降りて、バスに乗ると、曇天の空から雨が。土砂降りの中、納西族の家庭料理を体験しに、民家に向かう。土砂降りの雨は、民家に寄せていただくや、激しい雷雨になり、停電する始末。蠟燭を立てての食事かと思われたとき、電燈が点く。シナリオ外の思わぬ体験。酒がうまい。食事も私にはうれしかった。

食後はリクリエーション。屋根のある前庭に下りて、御主人と奥さん(だろう)、それにもう一人の女性(一夫多妻とは聞いていない)が、ダンスを始めた。先生方が加わって、踊りの輪が大きくなる。輪が萎む。日本人は盆踊りのリズムだ。何処か違う。何処か似ている。久保先生の巨体が、小柄な

美馬先生の動きが良い。直ぐに馴染む人、難しい人、ハミリカメラのファインダーには、「チンプトン・カンプトン」。だけどうれしい。リズムに誘われ、小太り爺さんが加わる。動きが鈍く、リズムについて行けない。小木曾先生は、踊る奥様の姿を追ってシャッターを切られた。小太り爺さんは、ここでこの時、白虎隊剣舞以外の群舞に初めて加わった。何ということだ。このような時間に遭遇できるとは。(ここのガイドさんは金さん。一緒に踊って下さった。)

三日目は大理へ。白族の食事から。大きなピンクの大角豆(ささげ)と鶏がらの塩茹でがでた。単身赴任のメニューに加えられそう。しかし今一の味だった。

ここでの食後は、納西族のおばあさんへのインタビュー。「対歌」の意味を知った。歌垣であった。おばあさんはどんな歌を歌ったのだろうか。御主人を見初めたときから歌ったのだろうか。御主人の方から歌い掛けたのだろうか。出合ったのは何処？歌垣の場ですか。認め合った後はどうしたのですか。山へ入って行かれたのですか。用意した質問は限りなかった。しかし今日は私のための時間ではない。また出掛けよう。

白族の髪飾りが美しい。若い女性・中年の女性・老いた女性それぞれがその年齢に応じたものらしい。未婚者は白い房を長くし、既婚者は短くするとか。ガイドの陶さんが教えてくれた。(陶さんは、名古屋で材木の買い付けをしていたとか。その時お世

話になった「日本人」に、ガイドを通して、恩返しをしたいという。何方かの御親切が、回り回って、今我々のところへ。そうなのだ。だから・・・)

ここは藍染めの仕事場。大きな木樽に藍が満ちている。染め上がった布が風に靡く。房の長い若い女性が白基調の民族衣装を着て、型染めをしていた。そこはそのまま即売点。私は和田先生の買い方を真似て、ベストを買った。この工房(御家庭か)のトイレは大き目のタイルが張られた水洗のトイレだった。水はバケツで？

かつての富豪宅が公開されていた。そこには小さな劇場もあり、白族の民俗芸能が披露された。お茶とお菓子が配られる。言葉が解ったらどれだけ勉強になったかと悔やまれた。

大理石の加工が見られるという。あの硬い石をどのように花瓶にするのか。途中、トイレ休憩のお土産屋で、腕輪の加工を目撃できた。十人も居たろうか。裸電球の下、電動研磨機で懸命に磨いていた。ここの男子トイレは、日本でも三～四十年前まで、駅や学校で見られた仕切りの無い様式のものだった。大きい方には仕切りはあったが、しゃがむと頭が隠れる程の仕切りだった。薄暗く、電燈が点いていた。そういえば、麗江のレストランのトイレもそうだった。

大理石はこの後、二千年ぐらいの間、採掘できるという。花瓶に、壺に、ペン立てに、石の模様の額入り飾り、そうして建材、彫刻材として。しかし大理が観光地と化し

た今日、採石は、山の裏側で進め、自然の景を残そうとしていると聞いた。

未明の町を山の上の大理空港へと向かう。四日目は昆明観光。再び馮さんの登場。花の市場へ。張先生が、麗江で買った蘭の鑑定をと、市場の蘭専門店へ連れて行ってくださった。これまで何回か、ドームの世界蘭展に出掛け、昆明の蘭にも魅せられて、既に幾種類かの花を咲かせて来た。「咲いてみないと解らない」。至極当然の答をもらった。どんな花が咲くのだろう。(現在、元気に成長している。蘭を仕入れにまた雲南へ行こう。)

この後は石林へ。カルスト台地の奇岩が面白かった。

帰りに仕入れた昆明茶の三種、今東京でも長野でもうまい。一箱は無くなってしまった。しかし腹は凹まない。

少数民族の教育資金にと、雲南芸大の李先生と学生が頑張っていた。絵画の展示即売、それに絵画制作の実演現場を体験できた。テレビで知ったミャオ族の少女にと祈りながら、買い求めた一本の軸がある。

「私も養生学会に入会しよう」と考えながら帰国した。

帰国後、都美術館の「四川文明展」に出掛けた。出口で中国の楽器等が販売されていた。彝族の青年が肩から吊って奏でていた楽器があった。販売員の閻さんと話せた。雲南の体験が早速役に立ち、また世界を広げることができた。つい昨日は、早稲田の学生に語った。

上海体育学院での宴席で某先生と約束したことを実行しよう。

御参加の皆様方にはいろいろ御心配をお掛けし、申し訳もありませんでした。皆様と御一緒できた素晴らしい「雲南の旅」、ありがとうございました。